

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380943

研究課題名(和文)「保育現場で求められる共感性」の多角的把握とその育成プログラムの提案

研究課題名(英文) Multidimensional understanding of "desirable styles of empathy for kindergarten and nursery-school teachers" and a proposal of the educational program

研究代表者

木野 和代 (Kino, Kazuyo)

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：30389093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：保育者に求められる共感性について多角的かつ多角的に明らかにするために、多次元共感性尺度を用いて、保育者の共感疲労および精神的健康との関連、理想像について保護者視点との比較、保育者歴による共感性の状態の差異、保育者養成課程学生の共感性の変化の様相などを検討した。その結果、他者の感情への巻き込まれやすさ、および、他者の状況について自分に焦点づけられた感情反応のしやすさを低減することが、保育者として精神的に健康な職業生活を継続することにつながると考えられた。これらの結果に基づき、保育者養成課程の学生のための共感性育成プログラムを提案した。

研究成果の概要(英文)：This study explored the desirable styles of empathy for kindergarten and nursery school teachers to keep their mental health at work, using the data collected from students in the kindergarten and nursery-school teacher education courses, kindergarten and nursery-school teachers, and parents of kindergarten and nursery-school children. The results showed that in maintaining their mental health it was necessary to reduce their emotional susceptibility and self-oriented emotional reactivity. From the results above, we made an educational program focusing on self-understanding of empathy to use in seminars for kindergarten and nursery-school teacher education courses.

研究分野：感情心理学・教育心理学

キーワード：多次元共感性 保育者 保護者 共感疲労 精神的健康 理想像 保育者養成 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

共感性は他者理解を深め、円滑な対人関係の形成の基礎となるものであり、社会生活を営む人間にとって高い共感性をもつことは重要と考えられる。しかし、他者の窮地に共感しすぎるのが、個人の精神的健康に好ましい結果をもたらさないことも考える。例えば、看護師などの対人援助職においては援助対象者に共感しすぎるがあまり、疲弊してしまうことがある。近年ではこのような現象を「共感疲労」とよび、主に臨床職従事者を対象に、いかに共感疲労に陥らず健康な職業生活をおくることのできるかに関する検討がすすめられている。

ここで、保育者も対人援助職の一つといえる。そして、共感性は保育者に欠かせない資質の一つとして重視されており (e.g., 秋政他, 2009), 保育者養成課程においては、共感的かかわりを扱う教育活動が行われることが多い。よりよい保育環境・内容を実現するためには、受け持つ子どもたちとのよりよい信頼関係を築く必要があり、そのためには相手の気持ちを理解・尊重する姿勢が必要となる。また子どもをとりまく家庭環境への配慮も重要であり、子どもへの対応にあたっては保護者と保育現場が協調していくことが重要となる。

しかし実際の保育現場では、保育者はさまざまな境遇の子どもと接することとなり、また保護者のニーズも多様化するなかにあつて、共感性の高いことはかえって共感疲労につながる危険性をはらむ。実際、保護者への対応についての戸惑いも現場では大きな問題となっている。

そこで本研究では、保育現場で求められる共感性を多角的にとらえ、これをいかに育成すべきかに関する提案を行うことを目的とする。

なお、共感性は多次元的な構造をもつ概念としてとらえられている (e.g., Davis, 1994)。認知的な側面 (相手の気持ちの推測・理解) と感情的な側面 (相手の気持ちへの反応) の区別に加え、それぞれに「自分が」どう感じるかという自己指向的なものと「相手が」どう感じているかという他者指向的なものがある (表 1; 鈴木・木野, 2008)。そして、共感の側面によってその働きは異なり、例えば自己指向的ではなく他者指向的に共感することが、個人の精神的健康により重要な役割を果たすことが示唆されている (木野・鈴木, 2010)。よって、共感性を捉えるにあたっては、多次元的な理解が必要である。

表 1. 多次元的アプローチにおける共感性のとらえ方

	認知面	情動面	
		並行的所産	応答的所産
他者指向性	視点取得 [PT]	被影響性 [ES]	他者指向的 反応 [OR]
自己指向性	想像性 [FS]		自己指向的 反応 [SR]

2. 研究の目的

以上の背景から、本研究では、保育者の資質として重要視されている共感性に着目し、共感疲労に陥ることなく、精神的に健康な職業生活を送るための共感性のあり方に関する検討することを目的とした。その際、保育者の精神的健康状態から見る望ましい共感性、保育者自身の視点から望ましいと考えられる共感性に加えて、家庭生活と園生活の橋渡しにおいて重要な役割を果たす保護者の視点からみた保育者に望まれる共感性の、3つの観点から検討することとした。多様化する保育現場において保護者への対応に苦慮することも少なくない中、保護者の視点を把握して多角的な検討を行うことは重要であると考えられる。また、共感性の把握には多次元的なアプローチを採用する (多次元共感性尺度 (MES) を利用する)。

そして、これらの結果に基づいて、そのような保育現場で求められる共感性を育成するために、保育者養成課程で導入可能な教育プログラムを考案する。なお、考案したプログラムの効果測定は本研究課題外で扱う課題であった。

3. 研究の方法

本研究では主に以下の調査を実施・分析した。これらの調査結果を中心に、共感性など各種社会性教育プログラムの文献調査をふまえて、共感性育成プログラムを考案した。

[調査 1] 保育者養成課程卒業生への継続調査

①調査対象者および手続き：養成課程卒業生 (女性) を対象に、卒業時 WEB または面接調査、1 年半後郵送調査または面接調査を実施した。ここでは、1 年半後に郵送調査に協力した保育士 7 名と、半構造化面接に協力した保育士 1 名の結果を報告する。

②調査内容：郵送調査：[a] 多次元共感性尺度 10 項目版 (MES-SF; 木野・鈴木, 2016; 本研究課題の一環として開発した) : 5 下位尺度について各 2 項目, 5 件法。[b] 理想的な保育者としての共感性を多次元的に問う項目群 : 5 下位尺度について各 2 項目, 5 件法。[c] WHO-5 精神的健康状態表 (1998 年版) : 最近 2 週間の状態について 5 項目・6 件法 (0-5 の配点)。[d] 職務状況に関する質問 : 園の規模, 園での担当, 園内の人間関係, 職務上の困難感, 上手くいかないことなど (自由記述)。

面接調査：養成課程在学中の共感性や感情労働と就職後の調査の変化を分析し、影響を与えた可能性のある出来事、現在の勤務状況、就職後の悩みの変化をたずねた。

[調査 2] 現職保育者を対象とした調査

①調査対象者および手続き：A 県内の 18 園から協力を得て 368 部の調査票を配布した。回答者数は 335 名であったが、回答不備や保育者以外の者 6 名分および男性 21 名分の回答は分析対象外とし、女性 308 名分の回答を分析した (20~65 歳; 保育歴 0.33~38.67 年;

クラス担任 196 名, 主任・副主任 18 名, 園長・副園長 10 名; 正規 236 名, 非正規 61 名)。

②調査内容: [a] [b]は同上。[c]共感満足(A)・共感疲労(C): 藤岡 (2012) による援助者のための自己テストを保育者版に修正し, 一部項目を採用。最近 1 か月の状態について 6 件法 (0-5 の配点)。[d]WHO-5 精神健康状態表 (1998 年版): 最近 1 か月の状態に変更。5 項目・6 件法 (0-5 の配点)。その他: 職務状況など。

[調査 3] 保育者養成課程学生の共感性および幼稚園・保育所実習経験

①調査対象者および手続き: 保育者養成課程 3 年次女子大学生を対象に, 縦断的に質問紙調査を実施した。調査実施時期は, 第一回が前期 5 月, 第二回が後期 1 月であり, 間の 9~11 月にかけて幼稚園実習 (3 週間)・2 回目の保育所実習 (2 週間) が行われた。両調査に回答した者は 80 名であった。本研究課題採択前の調査データを分析した。

②調査内容: 第一回調査では, MES 原版を用いた。5 件法。第二回調査では, 実習中の感情労働を測定するために Brotheridge & Lee (2003) による Emotional Labour Scale を邦訳して使用した。

[調査 4] 保育者養成課程学生の共感性と保育者特性に関する調査

①調査対象者および手続き: 保育者養成課程の 3・4 年次女子大学生 90 名を対象に質問紙調査を行った。

②調査内容: [a]MES 原版。5 件法。[b]藤村 (2010) による保育者特性インベントリーのうち共感性を除く 6 下位尺度。5 件法。[c]上述の理想的な保育者としての共感性を多次元的に問う項目群。5 件法。

[調査 5] 保育者養成課程学生および他専攻学生に対する共感性縦断調査

①調査対象者および手続き: (a) 保育者養成課程に在籍する女子大学生, (b) 心理学を専攻する女子大学生, (c) 教員養成課程に在籍する男女大学生を対象に, 質問紙法により縦断調査を行った。調査時期は 1 年次, 3 年次前期および後期であり, 3 回連続して回答した者は (a) 122 名, (b) 80 名, (c) 女 35 名, 男 53 名であった。ただし, (c) については教育実習後の 3 年次後期に調査を実施する予定であったが, 実施できなかったため, 2 回分の回答であった。また, (a) は本研究課題採択前の調査データであり, [調査 3] の回答者が含まれる。

②調査内容: [a]MES 原版。5 件法。

[調査 6] 保護者を対象とした調査

①調査対象者および手続き: 保育園・幼稚園児を持つ全国の母親 300 名 (保育園児の母親 200 名, 幼稚園児の 100 名) を対象に WEB

調査を実施した。母親の平均年齢は 36.0 歳 ($SD=4.95$, range=22~46) で, 就業状況は有職 193 名, 無職 107 名であった。対象児の平均月齢は 48.1 か月 ($SD=20.17$, range=3~77), 性別は男児 151 名, 女児 149 名, 出生順位は第一子 213 名, 第二子以降 87 名であった。

②調査内容: [a]理想的な保育者としての共感性を多次元的に問う項目群。5 件法。[b]保育者の感情演技規範を問う項目。1 項目 (保育者は, 仕事とプライベートを区別し, いつも元気に笑顔で対応するべきである), 5 件法。[c]回答者の個人属性: 年齢, 家族構成, 就業状況, 保育士・幼稚園教諭免許の有無およびその職務経験, 身近な保育者の存在の有無, 育児感情, 育児サポート・ネットワーク, PTA 活動など社会的活動の有無など。[d]対象児の属性: 性別, 年齢, 出生順位, 習い事の有無・種類など。[e]「保育者に望む共感的関わり」に関する項目群: 予備調査として保育園児の母親 7 名にインタビューを行った結果に基づき 4 側面・各 6 項目を作成。「望ましい」と考える優先項目を側面ごとに 3 つずつ選択。

4. 研究成果

(1) 多次元共感性尺度 10 項目版の開発

簡便な尺度の必要性から, 多次元共感性尺度 10 項目版 (MES-SF) を提案し, その利用可能性を MES 原版と同様の分析で確認した。データは, 原版作成時のものを用いた。その結果, 10 項目短縮版は, 原版を著しく損なうものではなく, 少数項目であるが故の弱점에配慮しながら, 代替利用が可能なるものであることを確認した。以降の研究で活用した。

(2) 保育者養成課程卒業生に対する継続研究

① [調査 1] の郵送調査協力者 7 名のデータ

職務状況 (職務上の困難感や失敗経験): 保育者として働き始めて感じたことについて, 4 名 (B・E・F・G) が事務仕事などの保育以外の仕事の多さに言及した。子どもやクラス運営・保護者のことに関する困りごとについては, 6 名 (A 以外) が保護者対応について記述した。このうち 3 名は気になる園児の存在も記述した (D・F・G)。これらの内容は, 加藤・安藤 (2013) による新任保育者の抱える困難を検討した研究において報告されたものでもあった。残る 1 名 (A) は, 紙面では書けないほどいろいろありすぎると回答した。

精神的健康状態の傾向: 得点可能範囲は 0~25 点で, 13 点未満の得点は精神的健康状態が低いとされる。7 名中 6 名が基準以下であり, 本研究の若手保育者の場合は, 精神的健康状態が良いとはいえない者が多かった。

精神的健康状態と共感性の関連: 最も精神的状態の良い保育者 G (18 点) の共感性は, 在学時から「被影響性」以外で高めに推移しており, 「自己指向的反応」は低下傾向にあった。一方, 精神的健康状態の悪い保育者 A (5

点)・C(9点)の共感性については、「被影響性」と「自己指向的反応」が上昇傾向・高止まりしていた。加えて、病気や療育対象の子どもへの対応に関する言及が特徴であった。不健康群における、共感性のこれらの特徴と困難な子どもへの対応に関する言及の符合から、共感性のこれらの側面は、困難な子どもへの対応時に、実際に問題となる可能性を確認できたといえよう。

他者のために思っている行動が上手くいかなかったこと：3名(C・E・G)は他の保育者との間のこと、他の3名(A・B・F)は園児や保護者との間のことをあげていた。後者の例から、子どものためでありながら、保護者の視点にたった情報伝達の難しさが推察された。また、保育者A・Bの内容は子どもや保護者との日常的なコミュニケーションであったが、Fの内容は気になる子や障害児の支援に関わるコミュニケーションであり、専門性も求められるやりとりであったと考えられる。

勤務先での相談相手：子どもやクラス運営・保護者に関する困りごとについて相談相手がいない者はいなかったが、精神的健康状態が良くない者ほど、相談相手として挙げる対象の多様性に乏しい傾向がみられた。精神的健康状態が良い者ほど、園内の相談相手として、園長などの管理職をあげており、若手保育者の精神的健康における多様な他者からの支援の重要性が示唆された。

②[調査1]の面接調査協力者1名のデータ

初任期のストレスと精神的健康：保育士Hの語りでは、保育士経験を振り返り、行事の運営、週案作成、事務作業、様々なシフトの中での職員間の連携、正職として非常勤職員にどう対応するか、3人担任の中で感じる指導力不足、保護者の思いとのズレ、統合保育の難しさが初任期の課題であった。これらの課題に対応するために、養成課程での協同的活動経験が役に立ったことのひとつとして語られた。また、同僚・先輩は常に尊敬を伴って肯定的に語られた。共感的な対応努力が報われない場面があっても、同僚・先輩は相談相手であり、支えになっていた。それにも関わらず、尊敬すべき同僚は目指すべき姿・理想となつて、できない自分と対照的に捉えられ、ストレス要因にもなっていた。そして、24時間保育を考えないようにする工夫が必要だと最近気がついたという。関わり方自体を扱う授業や、精神的健康に関する内容を、保育者養成課程で扱う必要があるかもしれない。

(3) 現職保育者における共感性と共感満足・共感疲労経験および精神的健康との関連

[調査2]のデータを分析した。MESを用いて対象者をタイプ分けしたところ、次の3群に対象者を分けることができた(図1)；他者指向性が平均並みだが、「被影響性」と自己指向性の高さに特徴がみられる第1群、他者指向性・「想像性」の高さと、「被影響性」・「自己指向的反応」の低さが特徴的な第2群、す

べて平均より低く、なかでも「想像性」の低さに特徴がみられた第3群である。

この3類型間で、共感満足(A1~A3)・共感疲労(C1~C4)、精神的健康を比較したところ(表2)、第2群は第1群・第3群よりも仕事仲間との関係における満足(A1)、保育者の資質としての満足(A3)を体験し、精神的健康度が高く、園児・保護者との関わりで否定的感情(C2)を体験していなかった。また、二次的トラウマ(C1)・否認感情(C3)に関しては、第1群よりも第2群・第3群の方が体験していなかった。自己のトラウマ想起(C4)は、第1群よりも第3群の方が体験していなかった。

以上から、「被影響性」・「自己指向的反応」が低く他者指向性が高い方(第2群)が、保育現場において適応的な共感性類型と考えられた。これは、これまでの保育者志望学生を対象とする仮想場面での研究結果と整合する。さらに、全体に共感性が低い者(第3群)と影響されやすく自己指向性が高い者(第1群)を比較すると、二次的トラウマなどを経験しにくいという点で、前者の方が困難が少ないといえよう。

なお、保育者歴群(5年刻みで4群に分けた)ごとに、共感性類型の人数を集計したところ、5年未満群では第2群が少なく、第1群が多い、15年以上群では第1群が少ない傾向が見られた。保育者経験と共感性の関連についてはさらに、後述の結果(7)において、保育者養成課程学生を加えて各側面の得点比較を行った。

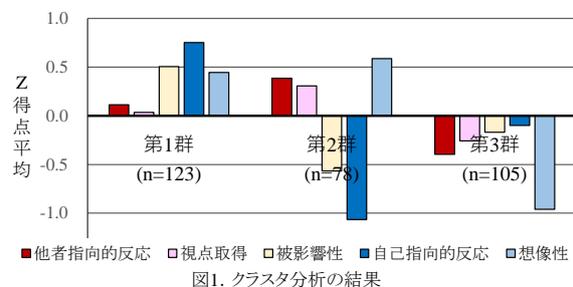


表2. クラスタ別共感満足・共感疲労・精神的健康得点の平均(標準偏差)

	第1群 (n=121~123)	第2群 (n=77~78)	第3群 (n=101~105)	備考
A1: 仕事仲間関係	3.12 (0.93)	3.46 (0.93)	2.99 (0.94)	2群>1群・3群
A2: 援助対象者関係	2.99 (1.02)	3.26 (0.93)	2.94 (0.90)	—
A3: 援助者資質	1.93 (0.95)	2.44 (1.01)	2.02 (0.86)	2群>1群・3群
C1: 二次的トラウマ	1.27 (1.03)	0.93 (0.87)	0.98 (0.88)	1群>2群・3群
C2: PTSD様状態	1.70 (0.85)	1.11 (0.79)	1.53 (0.84)	1群・3群>2群
C3: 否認感情	2.00 (1.34)	1.38 (1.43)	1.55 (1.32)	1群>2群・3群
C4: 自己のトラウマ想起	1.30 (1.09)	1.02 (0.97)	0.82 (0.82)	1群>3群
精神健康状態	12.44 (4.52)	14.27 (4.56)	12.45 (3.91)	2群>1群・3群

(4) 保育者養成課程学生の共感性と実習中の感情動労経験の関連

[調査3]では、共感疲労に結びつく可能性をもつ感情労働をとりあげ、共感性との関連を検討した。その結果、感情労働の各側面が、MES下位尺度のうち情動面での応答的反応とのみ関連が見られた(ORは感情表出の種類と、SRは感情表出の頻度、表層演技、深層演技との間で正の関連が見られた)。共感疲労傾向

との関連では「被影響性」の高さが問題視されてきたが（木野他，2011），実習中の感情労働経験とは関連が見られなかった。自分におきかえて考えたり，相手の立場に立った理解をするなどの認知的な共感や半ば自動的な巻き込まれではなく，他者の状況に対する感情反応の起こりやすさが，感情労働への従事につながる，つまり，相手の状況に応じて自分に生じた何らかの感情ゆえに，感情労働のいずれかをすることになると考えられた。

なお，感情労働が必ずしも否定的な結果をもたらすものではないことが指摘されている。プロとして感情管理ができていくことへの自負，つまり感情労働の正の側面は，共感疲労の対概念である共感満足にもつながるものであると考えられる。保育者としてよりよい保育を実現するためのスキルとして感情労働を捉える視点から，共感性との関連について検討することも有意義なものとなるだろう。以上の結果から，職務継続に向けての提言を考えるならば，自らの自己指向的反応傾向を理解したうえで，スキルとして自覚的に感情演技をするような調整案が考えられるだろう。

(5) 共感性の各側面と保育者特性との関連

[調査 4]のデータを分析したところ，他者指向的側面（OR・PT）は，保育者特性の愛他性，気働き，養育性と正の相関がみられ，さらに，他者指向的側面のうち「視点取得」は論理的思考とも正の相関がみられた。一方で，「自己指向的反応」と「被影響性」は行動力と負の相関を示し，さらに「自己指向的反応」は社交性とも負の関連を示した。因果の方向性は明確ではないが，これらの2側面が行動的積極性の低さにつながっていたことから，保育者としての適性を考えた場合も，これらの側面は低めるべきものと考えられた。

(6) 保育者養成課程学生の共感性の変化

[調査 5]のデータを用いて，保育者養成課程学生の在学中の共感性の変化を，他専攻の学生と比較した。以下では，主に「自己指向的反応」「被影響性」について述べる。これらの側面は，保育者養成課程学生における仮想場面での共感疲労傾向との関連から課題視されてきた共感性の側面である（e.g.，木野他，2011）。「自己指向的反応」については，心理学専攻学生が上昇傾向，保育者養成課程学生が下降傾向にあり，結果として3年次後期での両群での開き（保育者養成>心理学専攻）が見られた。「被影響性」については，保育者養成課程，心理学専攻学生ともに上昇傾向にあった。3時点目の調査が実施できなかったが，教員養成課程の女子学生と比べると，同じ子どもの教育支援にあたる職でも，学生たちの様相が異なることが見てとれる。特に「被影響性」の結果については，教員志望学生の方が巻き込まれにくくなっていく様子が見られた。変化の背景についてはさらなる検討が必要である。

(7) 現職保育者と保育者養成課程学生の共感性比較

[調査 2]と[調査 4]のデータを用いて，現職保育者（5年刻みで経験年数により4群に分けた）と養成課程学生の共感性を比較した（図2）。他者指向的側面（OR・PT）については，差が見られなかった。しかし，「自己指向的反応」では，養成課程学生が現職者よりも，また保育者歴5年未満の者は15年以上の者よりも高得点であった。「想像性」では，学生が現職者（保育者歴5～10年を除く）よりも高得点であった。「被影響性」では，学生が現職者よりも高得点であった。

養成課程学生の方が現職者より高得点であった「自己指向的反応」「被影響性」は，前述の通り養成課程学生における共感疲労傾向との関連から問題視されてきた側面である。これらの側面について，養成課程で低減を目指すようなプログラムの必要性が示唆された。

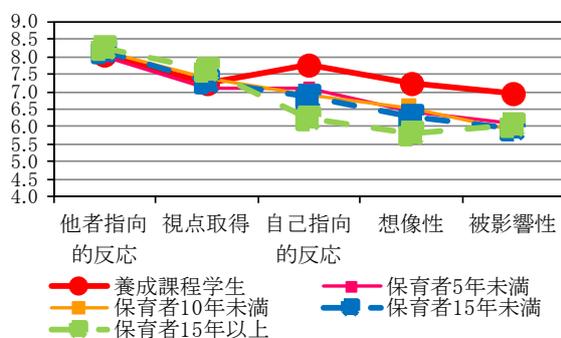


図2. 共感性の自己評価の比較（得点可能範囲は2～10）

(8) 保護者・保育者・保育者養成課程学生がイメージする理想の保育者の共感性

[調査 6]の保護者データに [調査 4]の保育者養成課程学生・[調査 2]の現職保育者データを加えて，理想的な保育者としての共感性像を比較した（図3）。保護者の抱くイメージとの差異に注目すると，「他者指向的反応」では保育園児の母親より現職者と学生の理想像の方が，また，幼稚園児の母親より学生の理想像の方が高得点であった。「視点取得」では，保護者より現職者と学生の理想像の方が高得点であった。「被影響性」では，10年～15年の現職者より保護者の理想像の方が高得点であった。「想像性」では，保護者よりも学生と10年未満現職者の理想像の方が，

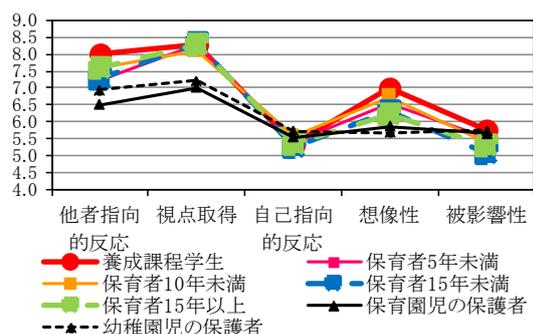


図3. 理想の保育者の共感性像（得点可能範囲は2～10）

幼稚園児の保護者より 10～15 年の現職者の理想像の方が高得点であった。以上から、他者指向的側面 (OR・PT) については、保護者の方が理想像の方が低いことがわかったが、保護者の保育者に対する具体的な期待内容も加味した検討も必要である。

(9) 保護者が保育者に望む共感的関わり

[調査 6]の質問[c][d]について、子どもの背景にある家庭・保護者が関わる側面を中心に分析したところ、「保護者への積極的な態度」という側面については、保護者は、子どもの家庭での生活習慣は気にかけてほしいものの、保護者自身の仕事や家庭生活に対しては程よい距離感を保ち、価値観の押しつけを好まない傾向が示された。ただし、関わり方の期待は子どもの年齢や子育て環境によっても異なる傾向がみられた。

(10) まとめ

以上、保育者養成課程学生、現職保育者、保護者等から収集したデータを用いて、保育者にとって望ましい共感性を多角的に検討した結果、「自己指向的反応」と「被影響性」に課題があることが示された。特に保育者養成課程の学生においては、将来の実務に向けて低減が目指されるべきと考えられた。

そこで、主に保育者養成課程の演習等で自己理解促進を中心とした共感性育成の教育プログラムを考案した。これは、4年生向けで、1回50分程度を3回に分けて実施するミニワークショップ形式のものである。1回目・2回目は、前半に共感性または共感疲労傾向の測定・解説・自己評価、後半に子どもや保護者との関わりに関するケースワークを実施し、これらの振り返りを宿題とする。3回目は、これまで2回の振り返りを共有し、保育者としての共感性のあり方を議論するとともに、自己教育力との関連が確認されているレジリエンス (森他, 2002) を測定し、自己理解を深める。さらに、職場の先輩 (同僚) との関わりに関するケースワークを行う。これらにより、共感性の自己理解を深めるとともに、現場でのさまざまな対応力を高めることを意図している。

本研究課題では、プログラムの提案までを課題としていた。今後は、提案プログラムの実践と効果検証、そして必要に応じての改善を予定している。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①木野 和代・内田 千春：保育者志望学生の共感性と感情労働の関連—園での実習経験の振り返りから—, 宮城学院女子大学研究論文集, 査読有, 第 126 号, 2018, pp. 1-11.
- ②木野 和代・鈴木 有美：多次元共感性尺度 (MES) 10 項目短縮版の検討, 宮城学院女子大学研究論文集, 査読有, 第 123 号, 2016, pp. 37-52.

[学会発表] (計 12 件)

- ①木野 和代・内田 千春・鈴木 有美：保育者養成課程学生の共感性の変化—他専攻の学生と比較して—, 日本教育心理学会第 60 回総会, 2018.
- ②内田 千春・木野 和代：保育者における共感性と共感満足・共感疲労の関連—多次元共感性尺度 (MES) を用いた類型化による検討—, 日本発達心理学会第 29 回大会, 2018.
- ③木野 和代・内田 千春・高橋 靖子・鈴木 有美：保育者にとって理想的な共感性についての認識と自己評価—現職者・保育者志望学生・保護者の視点から—, 日本カウンセリング学会第 50 回記念大会, 2017.
- ④高橋 靖子・木野 和代・内田 千春・鈴木 有美：保護者の望む保育者の関わり—子どもと保護者への共感性の視点より—, 日本発達心理学会第 28 回大会, 2017.
- ⑤Kino, K., Takahashi, Y., & Uchida, C. : The relationship between multidimensional empathy and nursery traits regarding students in the kindergarten and nursery-school teacher education courses. 31st International Congress of Psychology, 2016.
- ⑥木野 和代・内田 千春：若手保育者における共感性—失敗経験の内容と精神的健康状態の把握—, 日本感情心理学会第 24 回大会, 2016.
- ⑦内田 千春：保育者の共感性と感情労働 (2)—初任期経験の認識と専門性の発達—, 日本保育学会第 69 回大会, 2016.
- ⑧木野 和代・鈴木 有美・内田 千春：対人援助職における共感性 (7)—保育者養成課程卒業時 WEB 調査における自己評価と理想像—, 日本教育心理学会第 56 回総会, 2014.

[その他]

「保育の感情労働研究会」第 34 回研究会において、企画者からの要請により研究成果の一部を報告した (2018 年)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木野 和代 (KINO, Kazuyo)
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：30389093

(2) 研究分担者

内田 千春 (UCHIDA, Chiharu)
東洋大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：20460553
鈴木 有美 (SUZUKI, Yumi)
福岡女子大学・国際文理学部・准教授
研究者番号：00575160
高橋 靖子 (TAKAHASHI, Yasuko)
愛知教育大学・教育学部・講師
研究者番号：20467088